第２調査室
絵　図

調査レポート①
「岩槻城並町図」（いわつきじょうならびにまちず）

江戸幕府が編さんした武蔵国の地誌『新編武蔵風土記稿』（文献１）。１８３０年（文政１３年）に完成した同書は、江戸時代後期の岩槻城の様子を知る上で、欠かすことのできない史料です。その巻二百、「埼玉郡二」に「岩槻城並町図」という絵図が掲載されています。

右に掲げたのがその全体像です。原書の掲載の形にあわせた上下関係にしてあります。江戸方面が右手に来るような配慮なのでしょうか、西が右、東が左になっています。左側の大きな川が元荒川、その右側に沼に囲まれた岩槻城主郭部、その右側に武家地（絵図の記載は「士屋敷」）や町屋（絵図の記載は「町屋」）が描かれています。

この絵図は、第６調査室の調査レポート②、第７調査室の調査レポート①でも取り上げていますが、今回は、それらで取り上げなかったこの絵図の注目点を読み込んでいきます。

『新編武蔵風土記稿』の「岩槻城並町図」
国立公文書館デジタルアーカイブより（一部加工）

江戸時代前期とくらべてみると・・・

まず、江戸時代前期の図とくらべてみましょう。左が今回の主題の図、右が江戸時代前期の図です。

描画スタイルの違いなどを除いて、江戸時代前期と違うところを４点挙げておきます。

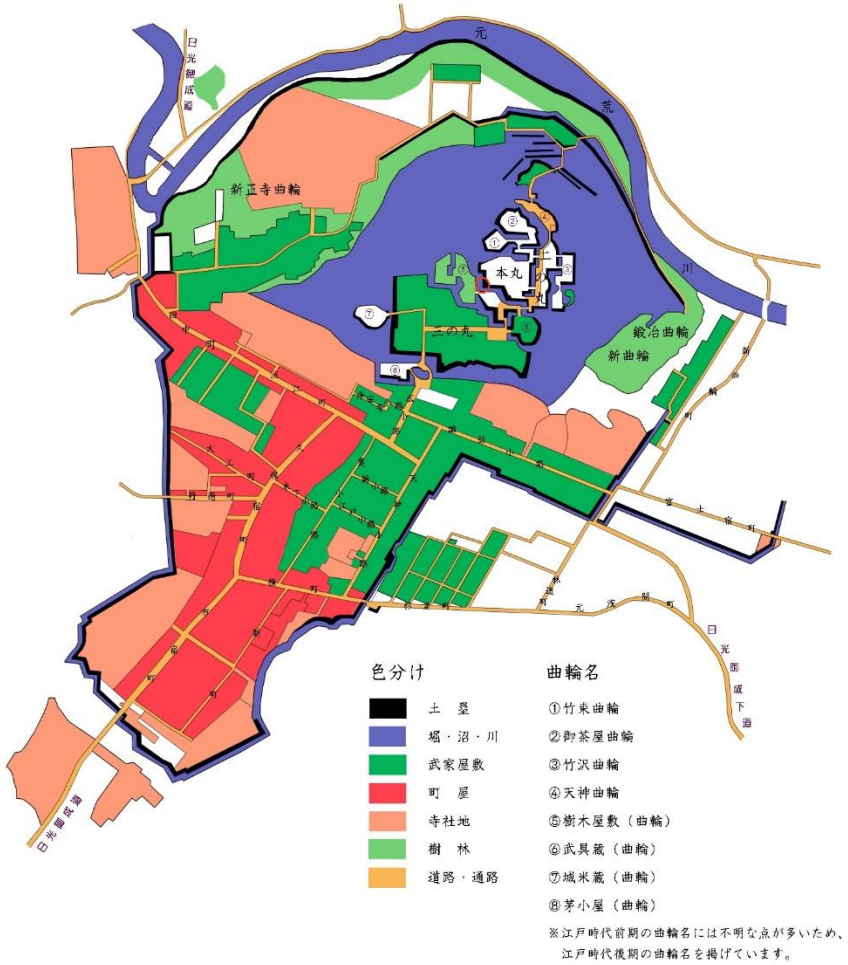
①町家部分では、大構の描画が堀のみ

②江戸時代前期に武家屋敷だったところで畑になっているところがある

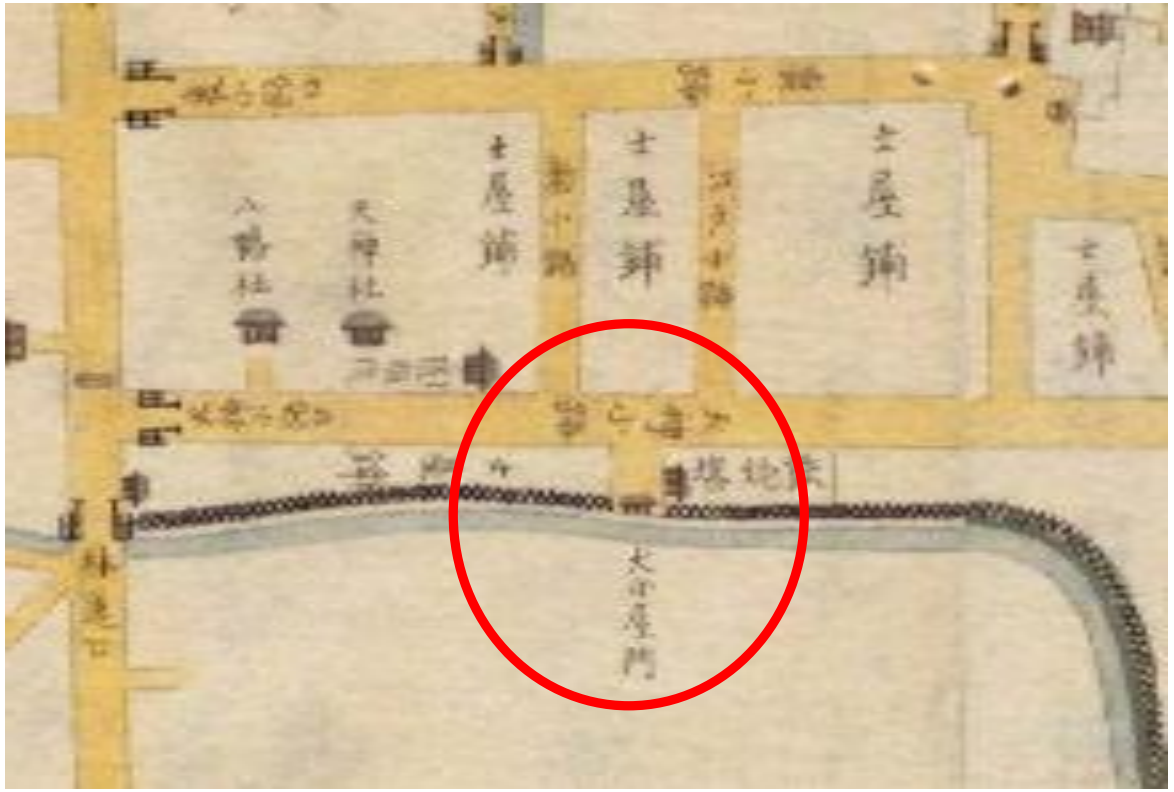
③大構に新たな「口」が開かれている

④町屋部分に大きな水路が描かれている

①からは、あるもの全てを描いているわけではないことがわかります。②は、城主となる大名の規模によって人口や都市構造が変化する、城下町の宿命です。以下、③と④をくわしく見ていきます。



あらたな「口」 －「口」の開削－



※「口」の注記を読みやすいように、左上の状態から90度回転してあります。

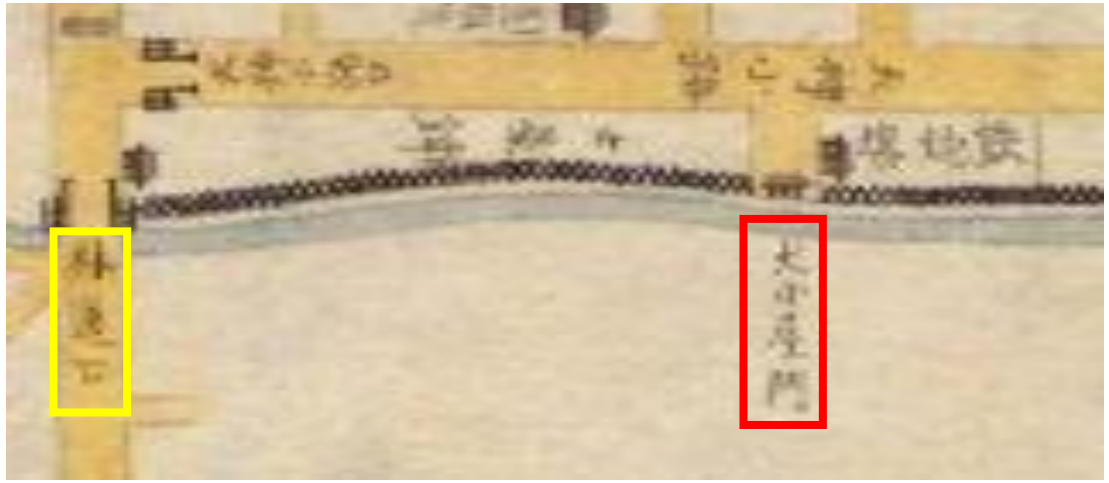
水色は堀、その上の×××は土塁上に設置された竹矢来、黄土色は道。赤丸を付けたところに×××が途切れて門の絵が描かれています。ここが新たに現れた「口」です。

新たな「口」の開削は、「平和」の定着と都市の発展の帰結として、外部との出入りの不便さを解消するために行われた、ひとまずこのように理解することができます。

ただ、描写をよく見ると、不思議なことに、道は門のところで途切れ、うかつに門から出ようものなら、堀に転げ落ちてしまいそうです。でも大丈夫、他の絵図、例えば「岩槻城幷侍屋敷城下町迄総絵図」の同じところを見ると、ここは土橋となっていて、外側の武家地へとつながっています。もろもろ考えると、描画の省略もしくはなんらかの錯誤によるものと思われます。

ここにはもう一つ注意をひくところがあります。注記された門の名前です。

あらたな「口」 －犬小屋門？林道口門？－



岩槻城並町図

岩槻城并侍屋敷城下町迄総絵図

「岩槻城并侍屋敷城下町迄総絵図」を下に並べてみました。くらべてみると、次のように整理することができます。

絵　図	新設口（赤枠）	旧来口（黄色枠）
岩槻城並町図	犬小屋門	林道口
岩槻城并侍屋敷城下町迄総絵図	林道口門	横町口門

「林道口」という口名が二つの間で入れ替わっています。これが口名の変更を物語るものなのかどうかは、他の史料の所見もあわせて慎重に判断する必要があります。結論を述べると、他の史料ではいずれも「岩槻城并侍屋敷城下町迄総絵図」と同じように記載されています。どうやら「岩槻城並町図」が孤立しているようです。幕府の編さんした『新編武蔵風土記稿』とはいえ、図の細部にいたるまで正確無比というわけではないということでしょう。

では、何故、門の名前が「犬小屋門」となってしまったのでしょうか。

あらたな「口」 －「犬小屋門」－

江戸時代最末期の１８４８年（嘉永元年）、岩槻藩士によって著された地誌『岩槻志略』（文献２）には、次のような記載があります。

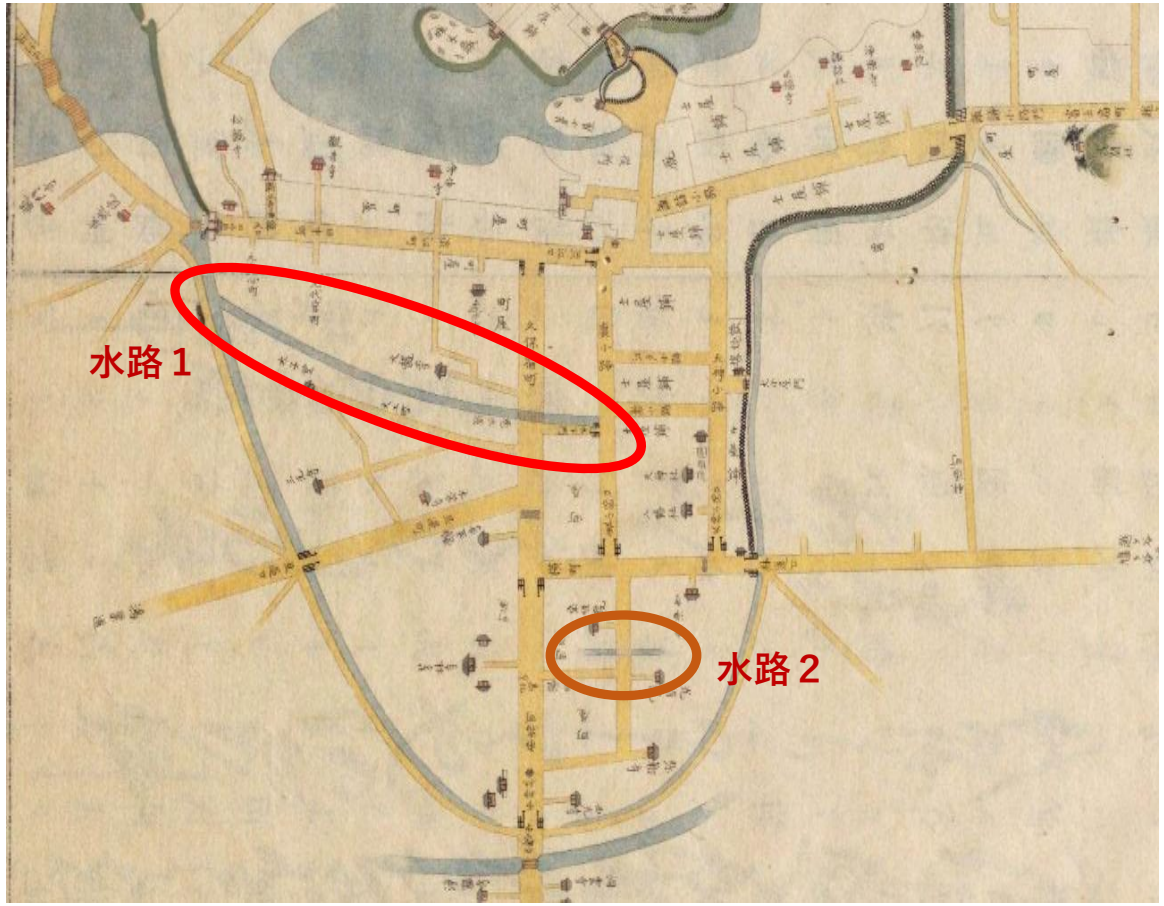
一　天神小路に犬小屋と称する所あり。番所あり。木戸の外を六番町という。昔の屋敷跡なり。今は広き畑にて日光御参詣御宿城の時は、家中の小屋を建て仮に移る所なり。

「郭内」の天神小路に「犬小屋」と呼ばれるところがあって、そこには番所があり、木戸の外は六番町といい、将軍の日光社参の際に、家中の者が仮住まいする小屋を建てる場所だ、大略このようなことが書かれています。ここでいう番所とは、各「口」の内側に設けられた、門の開け閉めと人の出入りを管理する警衛所のことで、前ページの図にも門の絵の右上に番所が描かれています。「木戸」は「口」に設けられた門のこと。ここでは「犬小屋」→番所→木戸の外＝六番町、という順で記述されていて、「口」周辺のことが記されているわけです。

この「犬小屋」というのは、岩槻の人々は犬が大好きだったからとか、伝令犬を飼養するためとかということで設けられたものではありません。江戸幕府５代将軍徳川綱吉政権の「生類憐みの令（しょうるいあわれみのれい）」政策のもと、岩槻藩が犬の保護のために設けた野良犬などの収容施設でした。

「生類憐みの令」は綱吉の死後、６代将軍家宣により即座に廃止されましたから、この犬小屋もすぐに撤去されたのでしょう。左の史料では天神小路に呼び名が残っていると記されていますが、犬小屋は大構外の「六番町」(番町武家地)にあったといい、明治時代の初期には「戌小屋」との地名がありました(『武蔵国埼玉郡村誌)、文献３)。『岩槻誌略』の記事と矛盾しますが犬小屋撤去から１世紀以上経過して、強烈な記憶を留めながらも、実際に犬小屋が設けられた場所は定かではなくなっていたのかもしれません。「犬小屋門」という絵図における注記も、そうした状況から生じた誤伝であったのかもしれません。

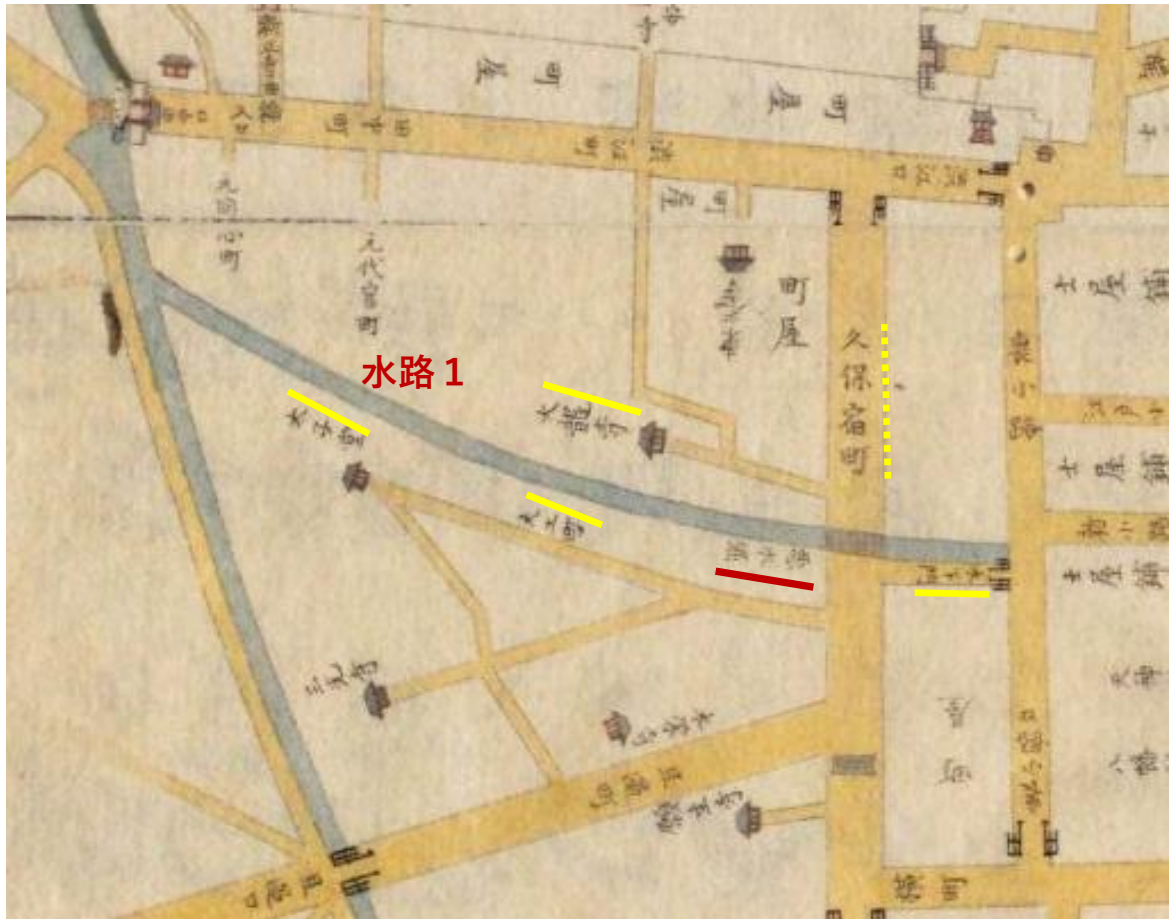
町の中の水路 －都市排水－



次に、「岩槻城並町図」の町屋部分に描かれた大きな水路をとりあげます。左の図では、そこに赤丸を付け、ほかにも描かれている水路に茶色の丸を付けました。説明の便宜上、赤丸をつけた水路を「水路１」、茶色の丸を付けた水路を「水路２」と仮に呼ぶことにします。これらの水路は、他の城絵図にはほとんど描かれていません。

水路１は、武家地の街路・裏小路のあたり（赤丸の右寄り）から大構の堀（同左寄り）に達する形で描かれていて、城の方向に延びる街路（竪町筋・たてまちすじ）を横断して、町屋を南北に区分しているかのようにも見えます。また、すぐ南側にある大工町の街路に並行して描かれていて、町の背割りになっているようにも見えます。史料に基づき、あるいは現地に立って観察してみると、これらの水路のはたらきはどのようなものであったと考えることができるでしょうか。

町の中の水路 －（仮称）水路１－　その１



水路１の場所を確認するために、まず図を拡大して、水路１のまわりの情報をよく見てみましょう。そうすると、水路１の脇に「悪水堀（あくすいぼり）」と注記されています（赤色の傍線）。「悪水」とは、悪い水、ではなく、排水路のこと。江戸時代後期における水路１の基本的な機能がこれでわかります。黄色の傍線をつけたのは、位置を絞り込む手がかりとなる情報です。

ここから、「木下門（きのしたもん）」は、久保宿町と裏小路を結ぶ街路・木下小路の町屋・武家地境に設けられた「口」、水路１は木下小路に沿っていることがわかります。久保宿町の通りと交差するところには橋が描かれています。「大龍寺（だいりゅうじ）」は１６２０年（元和６年）に岩槻城主青山忠俊（あおやまただとし）が開いた曹洞宗のお寺。大工町は久保宿町に附属する町で、岩槻城下町で唯一、職能を町名・街路名としています。その突き当りにある「太子堂（たいしどう）」は、職人の篤い信仰を集めた聖徳太子をまつるお堂。大工町ならではのお堂でしょう。

町の中の水路 －（仮称）水路１－　その２

今チェックした情報を現在の地図で確認してみましょう。

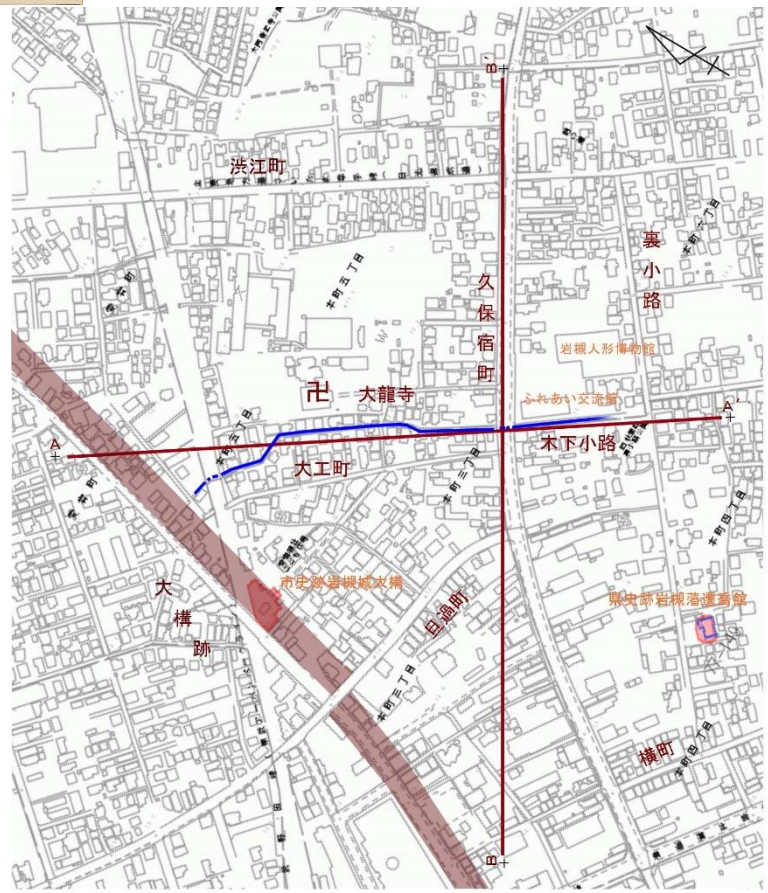
下の図は現在の地図に関連する情報を重ねたものです。これによれば、青線をつけたところが水路１にあたると考えられます。現在ここは、下の写真のように路地となっていて、水路の面影はありませんが、下水道整備が進むまではフタをして暗渠となっていました。

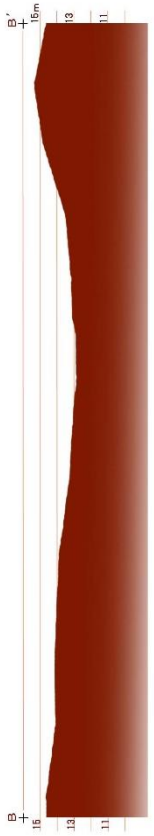
竪町筋の久保宿町街路より西側では、大工町の背割り、東側では街路沿いの開渠となっていたこともうかがわれます。

写真１　水路１跡の現況①

写真２　水路１跡の現況②

町の中の水路 －（仮称）水路１－　その３

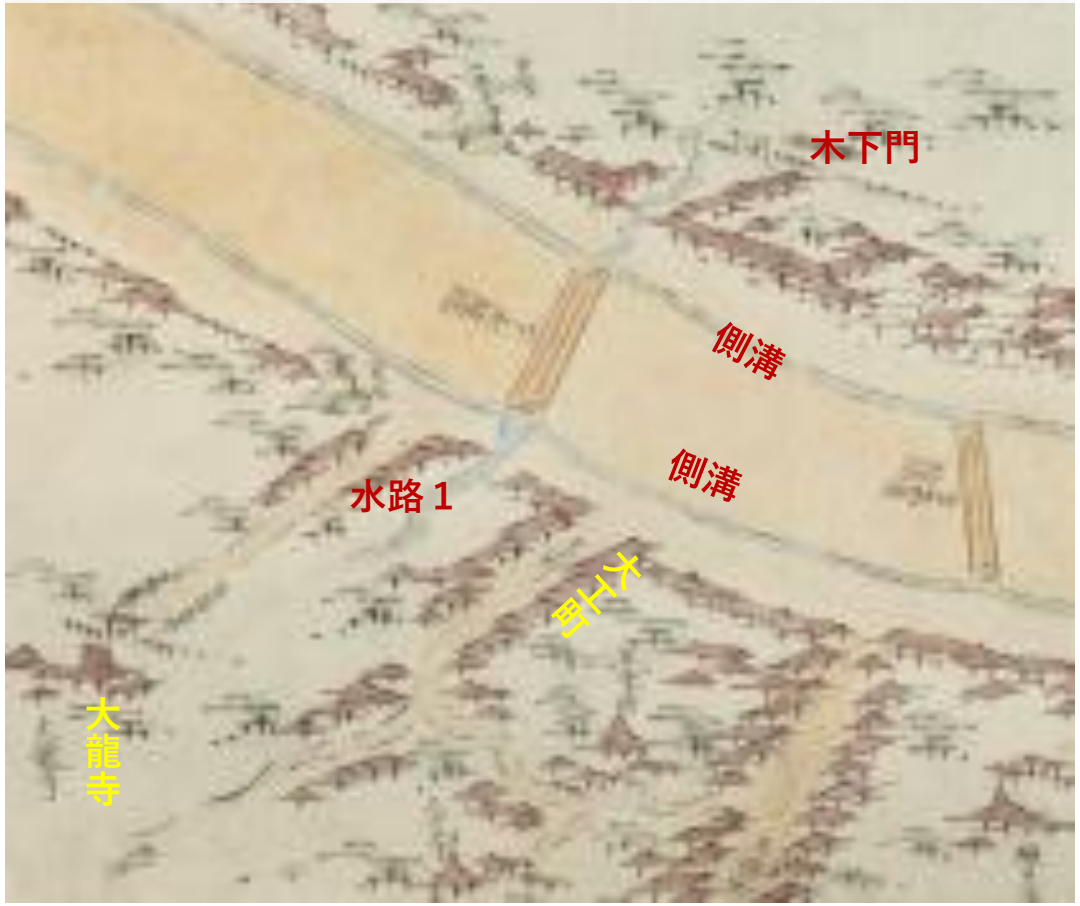




もう一つの図は、現在の地図を基につくった地形断面模式図です(左の図。断面図の垂直方向は任意の縮尺としてあります）。これによれば、水路１のあたり一帯は上幅にして５００m近い、大きな窪地になっており、その一番低くなったあたりに水路１が位置していること、この窪地は北西に向かって傾斜していることがわかります。その規模からいって、この窪地は人工的なものというよりも、自然地形に由来すると考えられます。つまり、北西側に向かって下っていく谷ということになります。水路１は、この谷の最も低い位置を流れる水路であるわけです。

この地に町場が形成される以前、水路１はいわば谷あいを流れる渓流だったかもしれませんが、城下町が形成されると、恐らくは流路の整備なども伴いつつ、周囲から集中する雨水や流水を処理する排水路となりました。先ほども言及したように、まさに「悪水堀」、しかしその言葉から受ける印象とは反対に、都市の浸水対策や衛生管理に不可欠な都市排水設備となったわけです。

町の中の水路 －（仮称）水路１－　その４



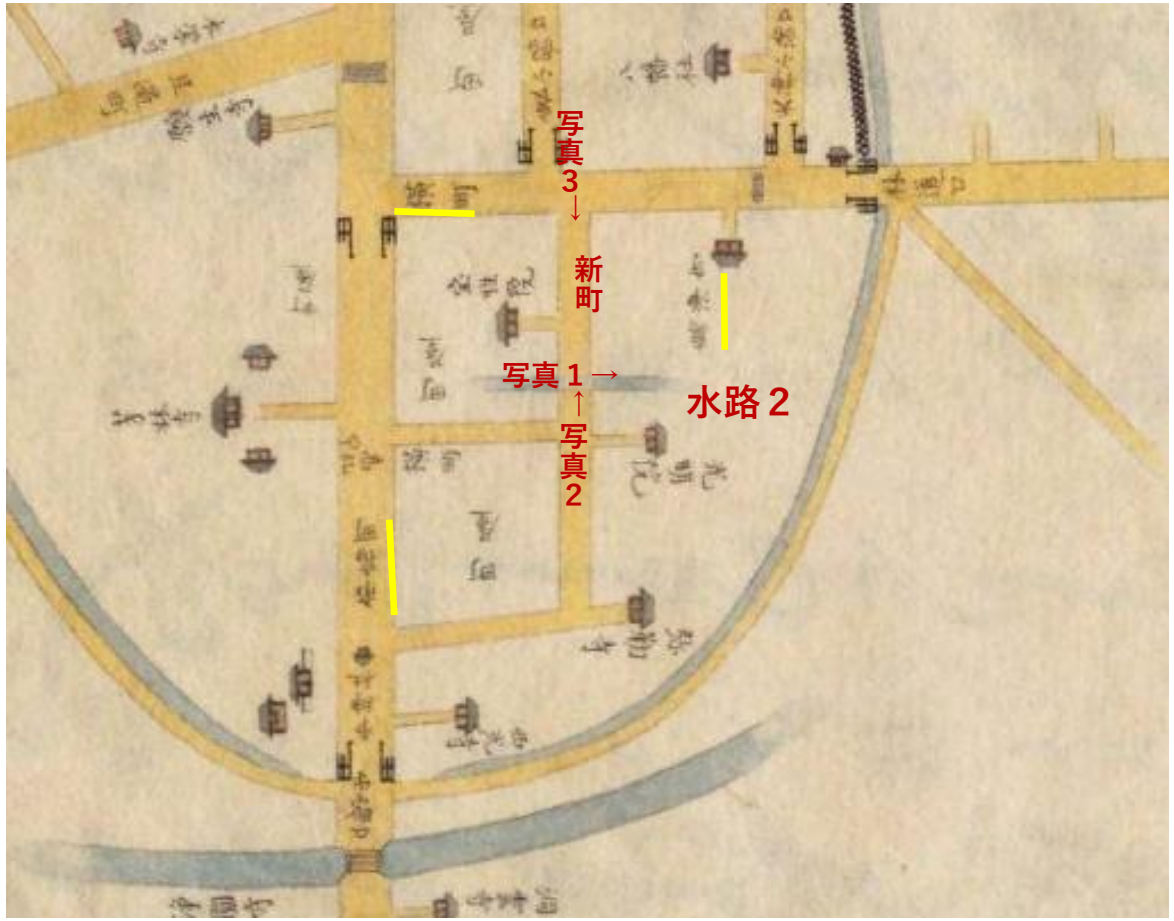
日光御成道絵図に描かれた水路１
東京国立博物館所蔵『日光御成道分間延絵図』（三巻之内三）（『**五海道其外分間絵図並見取絵図**』の内）より。画像はTNM Image Archives （画像番号:E0049342）

あらためて水路１のはたらきを考えてみましょう。２種類の図を用意しました。一つ目は、日光御成道を描いた絵図として有名な『日光御成道分間延絵図』の「岩附宿」の描写です（左図、文献４）。大龍寺の参道と大工町の路地との間に水路１が描かれています。久保宿町の街路を横断するところには橋が架けられていて、「下水板橋」との注記があります。その先は木下門に至る路地に沿って武家地へと伸びています。

この図で注目されるのは、久保宿町の街路の両側に設けられた側溝です。側溝は、街路と店先への湛水を防ぐための重要な設備でした。久保宿町街路の側溝は水路１と交差しており、側溝の水流は水路１から排水されたと考えられます。水路１は、都市設備としての側溝の機能に実効性をもたせる、大切な役割を果たしていたのです。

但し、その流末がどうなっていたのかは、よくわかっていません。「岩槻城並町図」が描くように直接大構の堀に流れ込んでいたとは考えられません。また、排水路として整備される以前、城の防衛ラインとして使われることはなかったのでしょうか。今後調査が必要な課題です。

町の中の水路 －（仮称）水路２－　その１



今度は水路２です。「岩槻城並町図」には町名が記されていませんが、市宿町に平行する町・新町、その街路を横断する水路です。

少し先を急いで、この水路跡の現状と周辺の写真を下に、地形断面模式図を次のページに掲げます。

写真１　水路２跡の現況

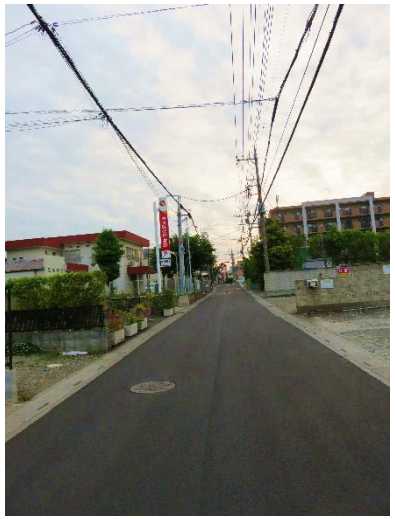
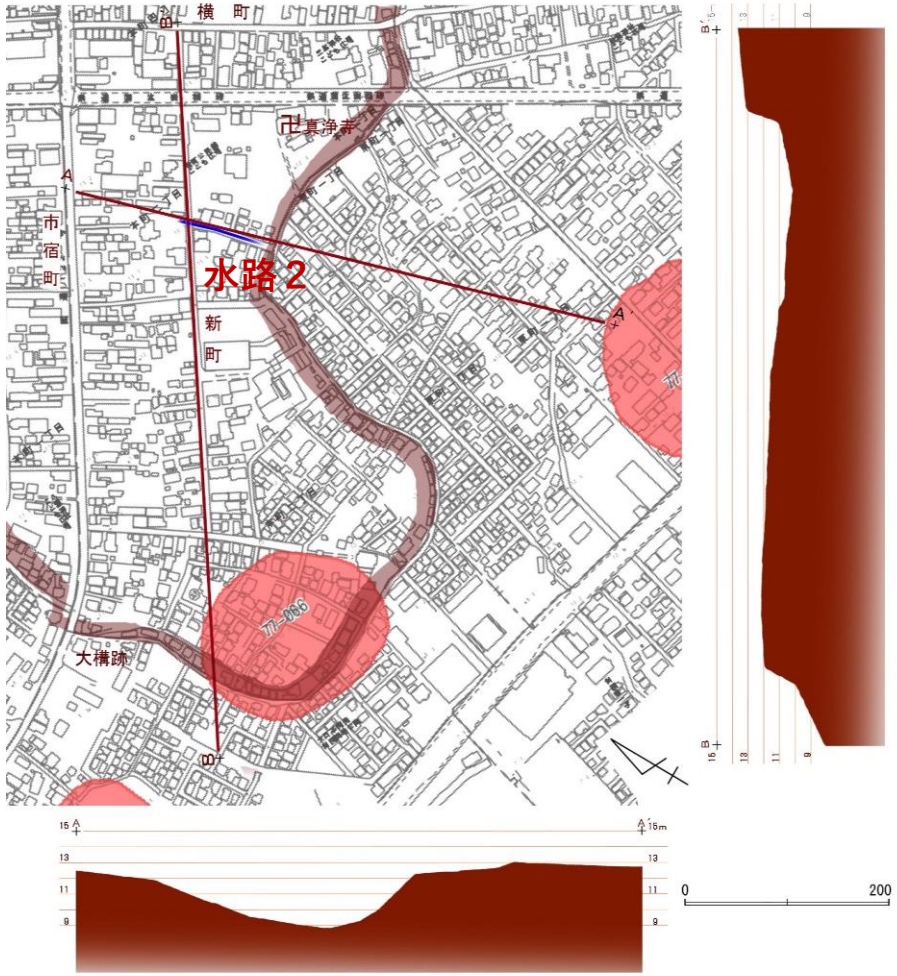


写真２　水路２跡から横町方面を望む

写真３　横町から水路２跡方面を望む

町の中の水路 －（仮称）水路２－　その２



この図によれば、南から伸びた谷が新町を横断し、市宿町の手前で止まっています。水路２はこの谷の中央部を流れる水路です。日光御成道を横断する水路１とくらべると、この水路２に関する情報は少ないのが実情です。このため、そのはたらきを絞り込むには制約が大きいのですが、それでも水路２の立地を踏まえれば排水路であるところに中心的な役割があったことは間違いないでしょう。

実は新町は、対馬守様が岩槻城主の時に市宿と横町の有力者たちが城主に申請して、田地を改め町屋に取り立てられたといいます(「古事新来之覚書」、文献５）。対馬守様は１６３８年（寛永15年）～１６５１年（慶安４年）の岩槻城主・阿部重次。江戸時代前期にける新規町屋取立てを伝える重要な情報です。この田地とは、ここで見た谷における土地利用形態を伝えています。新町取立てにあたっては、ある程度の埋立てなどの造成工事が行われたと思われますが、谷の名残の旧地形も残され、市宿町や横町などの先行する町屋からの排水を引き受ける排水路が整備されたのでしょう。その排水路こそ、水路２であったわけです。

※左図のオレンジ色の円は埋蔵文化財包蔵地です。

「岩槻城並町図」の意義

「岩槻城並町図」町家部分に描かれた橋（黄色の〇のところ）

水路と密接に関わるものに橋があります。水路１・２と街路が交差するところには、橋の描画があります。さらに、水路の描画はなく、橋だけが描かれているところもあります。それらはどのような水路だったのか。まちを構成する大事な要素である排水路を復元的に把握する上では、断片的ながらも、橋の情報も重要です。

「岩槻城並町図」は、江戸幕府が編さんした公式の地誌である『新編武蔵風土記稿』に掲載された図です。その意味では信頼性の高い図ということができます。けれども、細部にわたって正確無比な図かといえば、決してそうではありません。立体を平面に変換する今日の地図においてもそうですが、その図の主題によって、表現される情報の精度は大きく異なります。存在はしていても描かれないものがあって当たり前なわけです。

絵図を読み解く上でのそうした大前提とともに、描画や注記の中に誤りと考えられるものがいくつか見受けられます。江戸時代前期以降に大構に開削された「口」の描画と名称の注記は、他の史料と矛盾していて、何らかの誤りを含んでいると考えられます。

その一方で、他の絵図には詳しい描画がない二つの水路について、現在の地図と対比したり、周辺の地形も併せ考えると、それらは城下町において重要な機能を担った排水路だったことや、城下町が形成された地形と密接に関係していることがわかります。大きな限界があるものの、この絵図には重要な情報が内包されていることは間違いありません。

作成された時期と使用方法が明確な城・城下町図として、この「岩槻城並町図」は重要な史料です。史料としての限界を踏まえた上で、丁寧に読み解くことが必要な絵図ということができます。

おもな文献

・文献番号、執筆者、書名または論考名、（掲載書）、発行者、刊行年の順で紹介します
・文献の配列は、本文で言及したものを先に掲げ、その後は刊行年順に配列しました。
・文献番号を太字にしたものは、さいたま市立図書館が収蔵している図書です。所蔵館はさいたま市図書館ホームページにて御確認ください。

1　昌平坂学問所地誌調所　『新編武蔵風土記稿』　1830年　　※国立公文書館デジタルアーカイブ

2　高木業　『岩槻志略』1848年（嘉永元年）　埼玉県**『新編埼玉県史　資料編10　近世１・地誌』**埼玉県　1979年

3　埼玉県　「武蔵国埼玉郡村誌」巻之八　　**『武蔵国郡村誌』第十一巻**　埼玉県立図書館　1954年

4　『日光御成道分間延絵図』「岩附宿」（「五街道分間延絵図」のうち）　※東京国立博物館イメージアーカイブズ（TNM Image Archives ）

『日光御成道分間延絵図』第三巻　東京美術　1988年

5　「古事新来之覚書」勝田家文書　　**『岩槻市史近世史料編Ⅳ　地方史料（下）』**岩槻市　1982年